岩手大学教育学部研究年報　第43巻2号（1984．2）55～67

家庭生活認識に関する研究

――盛岡在住児童・生徒の家庭生活に関する実態と意識――

大澤京子*・池田揚子*・清水　房*・後藤和子*

（1983年10月15日 受理）

Ⅰ　は　じ　め　に

昭和54年度版「国民生活白書―生活基盤の充実と機会の拡大―」の中では，現代社会に於ける家庭の実状について次のように言及している[1]。

我が国の家庭は，戦後の新憲法下における制度改正や，更に30年以降の産業構造の変化や都市化の進展等急激な変化により，大きな変貌をとげてきた。農業就業人口が多かった時期（昭和30年で就業者の比率は38％）までは，生産機能を担った家庭は相当数あったが，その後の雇用者世帯の増大により，多くの家庭は生産機能を失っていった。また，核家族化によって，従来の老親による子どものしつけや文化の継承，相互扶助等の家族の機能は，親が担うようになるか，あるいは他の集団（職場や町内会またはマスコミなど）に帰属することとなり，家族の機能は安らぎや子どもの生育の場等に縮小してきている。更に，失業，病気，事故災害等の生じた場合には，柔軟な対応ができず，家族の解体化現象にまで進むことが多くなっている。

つまり，戦後の新民法や男女平等思想の普及，女性の高学歴化と職場進出，出産数の減少，給与所得者の増加等の要因により，人口は都市付近に集中し，核家族化と同時に構成員の少ない小家族化が進んでいる。更に女性の職場進出傾向は，結婚後，出産後も仕事を継続する傾向へ移行し，従来は家庭内で行われた機能のいくつかを家庭外へ託す傾向を高める要因になっている。

以上のような，社会・環境の激しい変化に伴い，家庭生活を教科の対象とする家庭科も変化に対応した内容や指導を行う必要が生じてきた。そこで，日本家庭科教育学会では，昭和54年度から「児童・生徒の発達と家庭科教育」の研究課題のもとに児童・生徒の発達に適した家庭科を求める研究が行われている。昭和56年度には，教育の対象である児童・生徒は，どのように家庭生活を認識しているか，発達段階による認識の相違点を明らかにすることを目的に全国的規模で調査が行われ，東北地区では盛岡市が中都市という範疇の中から選ばれ調査を実施した[2]。

Ⅱ　研　究　の　目　的

本研究は，全国調査の一環として盛岡市で実施した調査をもとにして，盛岡市内の小・中・高

* 岩手大学教育学部

校生は家庭生活をどのように認識し，期待しているか，また，実際の家庭生活に於ける役割についてどのように認識し参加しているかを明確にするものである。児童・生徒の発達による認識の変化や相違点を知るとともに，属性との関連も分析し，現代の児童・生徒の認識の基盤である家庭環境を明らかにしようとするものである。

Ⅲ　研究の方法

1　調査の概要

① 調査対象　盛岡市立仙北小学校（2年，4年，6年），盛岡市立城東中学校（2年），岩手県立盛岡第三高等学校（2年）に在籍する男女各50名，計500名を有効数とした。

② 調査期間　昭和56年1月22日～27日

③ 調査方法　質問紙調査法。ホームルーム又は授業時に一斉実施。

④ 調査内容

i）家庭生活の存在価値（帰宅時の気持，結婚の意志）

ii）家庭の機能（重視するもの，期待するもの）

iii）家族の役割（家事への参加，家族の役割分担）

iv）フェイス・シート（学年，性別，祖父母との同居，家族数，きょうだい数，父母の年齢，父母の職業）

2　調査の分析

調査資料を分析する視点として以下の仮説をたてた。

① 発達段階による変化　　年齢が進むにつれて認識は，感覚的なものから思慮的なものへと変化する。抽象的な「家庭」という把握から，「自分の属する家庭」という具体的なものへと変化する。

② 性差による相違　　生得的な認識の男女差とともに，「家庭のことは女のこと」というような性差別的な認識も強く存在している。

③ 属性による相違　　家族の形態，家族数，きょうだい数，両親の年齢，母親の就労の有無などによって，家庭生活に関する認識に違いがでる。

以上の3視点から分析を行った。

Ⅳ　結果及び考察

1　家庭の現況

第1表～第4表は，調査対象児童・生徒の家庭の現況についてまとめたものである。

家族形態について見た場合，核家族は全体の73.8%を占める。これは，全国調査に於ける核家族の比率（72.1%）[8]と差は余りない。拡大家族の形態は，祖母のみ12.8%＞祖父母とも10.8%＞祖父のみ2.6%の順である。また，父親・母親のいずれかを欠く家庭は，全体の4.2%（母のみ3.2%，父のみ1.0%）となっている。

家族数は，最も多いのが4人家族50.6%＞5人19.8%＞6人14.6%＞3人8.8%＞7人以上6.2%の順である。きょうだい数は，2人63.4%＞3人22.6%＞ひとりっ子9.8%＞4人以上4.4%の

第1表 家 族 形 態

	核家族	拡大家族			計
		祖父母	祖父のみ	祖母のみ	
小 2	74 (74.0)	17 (17.0)	2 (2.0)	7 (7.0)	100
小 4	69 (69.0)	12 (12.0)	2 (2.0)	17 (17.0)	100
小 6	76 (76.0)	5 (5.0)	6 (6.0)	13 (13.0)	100
中 2	76 (76.0)	11 (11.0)	1 (1.0)	12 (12.0)	100
高 2	74 (74.0)	9 (9.0)	2 (2.0)	15 (15.0)	100
男子計	188 (75.2)	24 (9.6)	6 (2.4)	32 (12.8)	250
女子計	181 (74.2)	30 (12.0)	7 (2.8)	32 (12.8)	250
合計	369 (73.8)	54 (10.8)	13 (2.6)	64 (12.8)	500

( ) 内は%

第2表 家 族 数・きょうだい数

	家族数					きょうだい数			
	～3人	4 人	5 人	6 人	7人～	1 人	2 人	3 人	4人～
小 2	6(6.0)	56(56.0)	18(18.0)	15(15.0)	5(5.0)	8(8.0)	70(70.0)	19(19.0)	3(3.0)
小 4	9(9.0)	43(43.0)	22(22.0)	21(21.0)	5(5.0)	11(11.0)	61(61.0)	23(23.0)	5(5.0)
小 6	12(12.0)	49(49.0)	23(23.0)	11(11.0)	5(5.0)	13(13.0)	58(58.0)	24(24.0)	5(5.0)
中 2	9(9.0)	55(55.0)	16(16.0)	15(15.0)	5(5.0)	6(6.0)	68(68.0)	23(23.0)	3(3.0)
高 2	8(8.0)	50(50.0)	20(20.0)	11(11.0)	11(11.0)	10(10.0)	60(60.0)	24(24.0)	6(6.0)
男	23(9.2)	138(55.2)	37(14.8)	38(15.2)	14(5.6)	27(10.8)	162(64.8)	51(20.4)	10(4.0)
女	21(8.4)	115(46.0)	62(24.8)	35(14.2)	17(6.8)	21(8.4)	155(62.0)	62(24.8)	12(4.8)
計	44(8.8)	253(50.6)	99(19.8)	73(14.6)	31(6.2)	48(9.6)	317(63.4)	113(22.6)	22(4.4)

( ) 内は%

第3表 両 親 の 年 齢

	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60 歳 ～	なし・不明
父親	—	133(26.2)	305(61.0)	44(8.8)	2(0.4)	16(3.2)
母親	4(0.8)	268(53.6)	212(42.4)	8(1.6)	1(0.2)	7(1.4)

( ) 内は%

第4表 両 親 の 職 業

(N)	つとめ	店・工場	農林漁	その他	内職	無職
父 (484)	363(75.0)	55(11.4)	11(2.3)	51(10.5)	2(0.4)	2(0.4)
母 (492)	160(32.5)	70(14.2)	9(1.8)	44(8.9)	24(4.9)	185(37.5)

( ) 内は%

順で平均2.2人である。全国調査の家族数，4人42.9%＞5～6人40.7%＞3人8.3%＞7人以上7.4%。きょうだい数，2人56.9%＞3人29.3%＞ひとりっ子7.8%＞4人以上5.6%と比較した場合，本調査は同一傾向である。

今回は，調査対象を盛岡市内に限ったため，家族構成は核家族小規模の都市型が大半を占めたと考えられる。

父親の年齢は，40歳代が61.0%，母親の年齢は30歳代が53.6%である。戦後生まれの両親（ここでは，39歳までを意味する）は，父親の26.2%，母親の54.4%である。これらの戦後教育を受けた両親によって形成される家庭は，それ以前の教育を受けた両親による家庭とは違った雰囲気を持ち，児童・生徒の家庭認識に様々な影響を与えていることが推察できる。

父親の職業は，つとめ人が圧倒的に多く，全体の75.0%である。農林漁の第一次産業は，2.2%で4位である。母親の職業は，無職が37.5%で1位，2位のつとめ人32.5%との差は僅少である。また，何らかの形で職業を持っている有職母親は，全体の61.4%である。内職，店，農林漁の在宅又は家庭の近くで仕事をすることが可能な母親を含めても，家庭内で子どもと密接な時間を持つことが可能な母親は52.7%である。

2　家庭生活の存在価値

児童・生徒にとって家庭生活はどのような存在価値を持っているか，を帰宅時の気持とその理由を問うことで明らかにした。「うれしい」「ほっとする」のプラスの価値付けをしたものは，全体の63.4%である。「うれしい」は学年進行によって下降するが，「ほっとする」は上昇している。「つまらない」「家に入りたくない」のマイナスの価値付けと「感じない」「わからない」のゼロの価値付けをしたものは，全体の32.8%で，学年性別による傾向は見られない。

理由の1位は，「ゆっくりできる」の35.4%である。これは学年進行とともに上昇し，女子の37.2%が選択している。「家に誰かいる」「家に誰もいない」という対人的理由を選択する傾向は，低学年に高い。同様に，「好きなことができる」に示される家庭に於ける余暇時間に積極的に働きかける傾向も低学年に高い。これは，年齢が低いほど，自己活動の中に家庭や家族の占める割合が大きいことを示している。以上から，家庭の存在価値として「ゆっくり出来るからほっ

第5表　帰宅時の気持（百分比）

		うれしい	ほっとする	感じない	つまらない	家に入りたくない	その他・わからない
小	2	38.0	29.0	18.0	7.0	0	8.0
小	4	17.0	35.0	23.0	14.0	0	11.0
小	6	13.0	54.0	17.0	4.0	0	12.0
中	2	12.0	55.0	16.0	7.0	2.0	8.0
高	2	6.0	58.0	22.0	5.0	2.0	7.0
計	%	17.2	46.2	19.2	7.4	0.8	9.2
	N	86	231	96	37	4	46
計	男	17.6	43.2	20.8	7.2	1.2	10.0
%	女	16.8	49.2	17.6	7.6	0.4	8.4
N	男	44	108	52	18	3	25
	女	42	123	44	19	1	21

第6表　帰宅時の気持・その理由（百分比）

		家に誰かいる	ゆっくりできる	好きなことができる	家に誰もいない	仕事をさせられる	うるさい	家に帰るのはあたりまえ	その他	わからない
小2	男	14.0	18.0	20.0	12.0	0	2.0	12.0	10.0	12.0
	女	12.0	26.0	28.0	8.0	0	0	6.0	2.0	18.0
小4	男	16.0	20.0	14.0	12.0	2.0	2.0	10.0	4.0	20.0
	女	8.0	24.0	14.0	16.0	4.0	2.0	20.0	6.0	6.0
小6	男	2.0	34.0	20.0	6.0	0	0	22.0	6.0	10.0
	女	4.0	50.0	20.0	4.0	0	2.0	4.0	2.0	14.0
中2	男	4.0	48.0	8.0	2.0	0	6.0	10.0	10.0	12.0
	女	8.0	42.0	18.0	0	0	8.0	14.0	2.0	8.0
高2	男	0	48.0	12.0	2.0	0	2.0	14.0	6.0	16.0
	女	0	44.0	10.0	0	0	2.0	20.0	16.0	8.0
計	%	6.8	35.4	16.4	6.2	0.6	2.6	13.2	6.4	12.4
	N	34	117	82	31	3	13	66	32	62

とする」という「気分の安定」を上げることができる。

3　結婚の意志

次に，将来結婚して家庭をつくるかつくらないかの意志と理由を問い，家庭形成についての意欲について明らかにした。

結婚の意志は，わからない52.4%＞つくると思う36.8%＞つくらないと思う9.4%の順である。学年の進行につれて，「つくると思う」が上昇し，「わからない」は下降している。性差を見ると，「つくると思う」女子41.2%＞男子32.4%，「わからない」女子48.8%＜男子56.0%である。学年進行につれて，家庭生活に対する積極性がみられ，女子は男子よりも積極的である。

理由は，「わからない」「その他」を含めた9項目から選択させた。意志の度合，背定・否定によって分類したのが第8表である。積極的肯定には，「自分の家庭を作りたい」「好きな人と一諸にくらしたい」，消極的肯定には，「誰でもすることだから」，積極的否定には，「自由に生きたい」，消極的否定には，「自信がない」「相手がみつかりそうもない」が該当する。全体では，わからない36.6%＞積極的肯定29.2%＞積極的否定13.2%＞消極的否定11.8%＞消極的肯定6.2%の順である。学年の進行につれて積極的肯定が上昇し，わからないは下降する。性差では，女子が積極的肯定を選択する比率が高く，更に，学年進行につれて，その傾向は上昇する。次に，肯定否定いずれの理由を選択するにしても積極的か消極的かを比較し，結婚に対する関心の度合を見た。積極的42.4%＞わからない36.6%＞消極的18.0%となる。「わからない」も消極的志向として合計すると54.6%となる。全国調査では，積極的53.0%＞わからない25.7%＞消極的18.5%であり，消極的志向は43.2%である[4]。盛岡市の児童・生徒は家庭形成については消極的であるといえる。

結婚の意志と理由のクロス集計によって，家庭形成の意欲を見てみると，「つくる」を選択した内の77.1%，「つくらない」を選択した57.4%が積極的理由づけをしているが，これは全体の33.8%である。一方，「わからない」を選択し，理由も「わからない」を選択したものは66.4%，

第7表　結　婚　の　意　志

		つくると思う	つくらないと思う	そ　の　他	わからない
小	2	20(20.0)	6(6.0)	0	74(74.0)
小	4	14(14.0)	20(20.0)	1(1.0)	65(65.0)
小	6	34(34.0)	7(7.0)	2(2.0)	57(57.0)
中	2	54(54.0)	6(6.0)	1(1.0)	39(39.0)
高	2	62(62.0)	8(8.0)	3(3.0)	17(17.0)
計	男	32.4	10.0	1.6	56.0
%	女	41.2	8.8	1.2	48.8
N	男	81	25	4	140
	女	104	22	3	122
計	%	36.8	9.4	1.4	52.4
	N	184	47	7	262

（　）内は%

第8表　結　婚　の　理　由（百分比）

		積極的肯定	消極的肯定	積極的否定	消極的否定	わからない	そ　の　他
小2	男	8.0	8.0	14.0	16.0	52.0	2.0
	女	24.0	2.0	14.0	16.0	44.0	0
小4	男	10.0	2.0	18.0	12.0	52.0	6.0
	女	8.0	6.0	16.0	12.0	56.0	2.0
小6	男	20.0	6.0	8.0	16.0	48.0	2.0
	女	34.0	2.0	22.0	6.0	36.0	0
中2	男	30.0	14.0	18.0	6.0	32.0	0
	女	58.0	6.0	0	12.0	20.0	4.0
高2	男	46.0	12.0	14.0	8.0	10.0	10.0
	女	54.0	4.0	8.0	14.0	16.0	4.0
計	男	22.8	8.4	14.4	11.6	38.8	4.0
%	女	35.6	4.0	12.0	12.0	34.4	2.0
N	男	57	21	36	29	97	10
	女	89	10	30	20	86	5
計	%	29.2	6.2	13.2	11.8	36.6	3.0
	N	146	31	66	59	183	15

第9表　結婚の意志と理由のクロス集計

(N)	積極的肯定	消極的肯定	積極的否定	消極的否定	わからない
つくると思う (184)	142(77.2)	31(6.8)	4(2.2)	—	4(2.2)
つくらないと思う (47)	1(2.1)	—	27(57.4)	12(25.5)	3(6.4)
そ　の　他 (7)	2(28.6)	—	2(28.6)	—	2(28.6)
わからない (262)	1(0.4)	—	33(12.6)	47(18.0)	174(66.4)

（　）内は%

「自信がない」「相手がみつかりそうもない」の消極的理由づけを含めると84.4%，全体の44.2%で，これからも結婚（家庭形成）への消極的姿勢が推察できる。

4　家庭の機能

家庭の機能とは，家庭が社会を構成する最小集団としての役割は何か，ということを意味している。家庭を構成する家族ひとひとりの生活が，時代，社会，地域，職業等の影響をうけ，家庭の機能も変化する。歴史的な変化とともに，家父長制大家族から民主的小家族へと量，質的にも縮小し，社会全体の進歩につれて家族の中で果されていた機能を社会が代行することも可能になった。では，現代の家庭では，どのような機能が重視され，期待されているか。

①重視している機能　家庭の機能を10項目に分類し，重複を認めて選択させた。重視しているものは共通しており，1位は「家族のみんなが楽しくすごす」(83.4%)，2位は「子どもを良い人間に育てる」(59.2%) である。最も低いのは，「その家の習慣を受けついで行く」(19.6%) である。学年進行による傾向はみられない。男女比較では，選択順位1，2位は同一であるが，

第10表　家庭の機能 —重視—（百分比）

	子どもを生む	休息	夫婦	暮し・もの	暮し・お金	子どもの教育	家の習慣	老人・病人	精神安定	近隣友人
男	34.8	41.6**	28.0	40.0	37.2	57.2	19.2	28.4	78.8	31.6
女	34.8	28.4	21.6	35.2	26.4	61.2	20.2	29.2	88.0	24.8
核家族	35.5	35.2	24.6	37.1	31.1	61.0	19.5	27.4	85.5	27.9
拡大家族	32.0	34.4	24.4	38.9	33.6	54.2	19.8	32.8	91.6**	29.0
ひとりっ子	37.5	37.5	20.8	45.8**	29.2	64.6	29.2	29.2	85.4	25.0
多数きょうだい	34.5	34.7	29.9	36.7	32.0	60.4	18.6	28.8	83.2	28.5
母親 ～39歳	33.8	37.5	22.0	43.8**	35.7	62.5	22.8	31.6	86.4	30.9
40歳～	35.7	31.7	28.1	30.3	26.7	54.3	15.4	24.4	79.6	24.4
計	34.8	35.0	24.8	37.6	31.8	59.2	19.6	28.8	83.4	28.2

* 1%水準で有意差あり　** 5%水準で有意差あり

第11表　家庭の機能 —期待—（百分比）

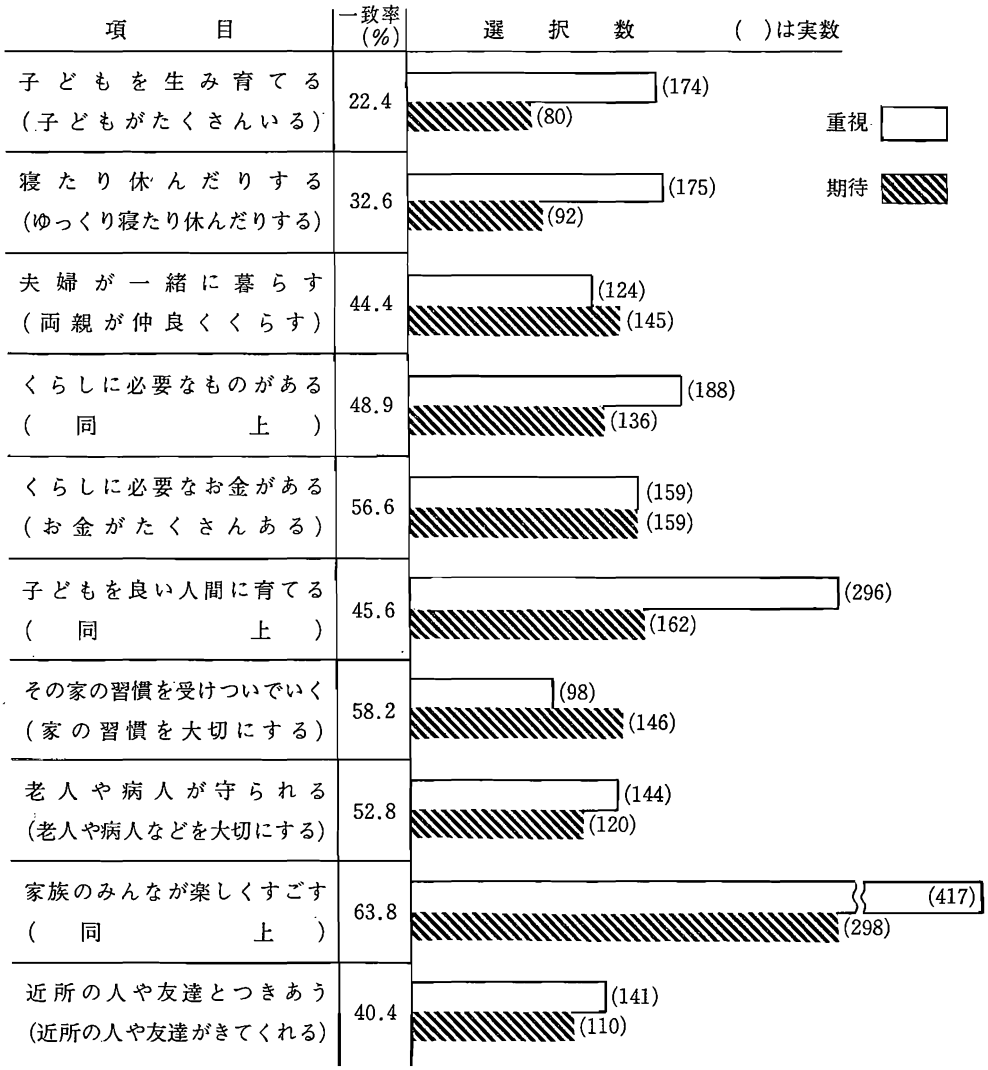
	子どもを生む	休息	夫婦	暮し・もの	暮し・お金	子どもの教育	家の習慣	老人・病人	精神安定	近隣友人
男	18.4	27.6*	29.6	32.4**	38.0**	36.8**	29.6	26.0	58.4	28.0**
女	13.6	9.6	28.4	22.0	25.6	28.0	28.8	22.0	60.8	16.0
ひとりっ子	27.0*	22.9	22.9	29.2	35.4	22.9	29.2	22.9	60.4	31.2
多数きょうだい	15.7	20.1	29.6	27.0	31.4	33.4	29.2	24.1	59.5	21.0
父親 ～39歳	28.6*	15.8	36.8	36.1	35.3	44.4*	50.4*	40.6	69.9	33.8*
40歳～	10.8	19.8	26.9	24.4	30.9	28.7	21.5	18.6	56.4	17.8
母親 ～39歳	22.0*	17.3	38.2*	32.4	34.2	42.6*	42.6*	34.6*	67.3*	29.8*
40歳～	5.0	20.0	18.1	21.3	28.5	19.9	13.4	11.3	49.3	17.2
計	16.0	18.4	29.0	27.2	31.8	32.4	29.2	24.0	59.6	22.0

* 1%水準で有意差あり　** 5%水準で有意差あり

男子の3位に「寝たり休んだりする」(41.6%，有意差あり)，4位に「くらしに必要なものがある」が入っている。女子は1，2位が高率で選択されているため，3位以下の選択率が低くなっている。学年進行につれて，男子では，「老人や病人が守られる」，女子では「くらしに必要なものがある」「その家の習慣が守られる」が下降している。家族形態別比較では，拡大家族の「家族がみんな楽しくすごす」が91.6%と高い率で選択されている。拡大家族では，構成の複雑化と量の増大から必然的に家族の和について各々が考えるためであろう。

②期待している機能　期待することとして1位に選択されたのは，「家族のみんなが楽しくすごす」である。10項目中7項目まで，学年進行につれて期待の度合は下降している。男女別では，男子の期待度合が高く，「ゆっくり寝たり休んだりできる」「近所の人や友だちがきてくれる

図1　重視する機能と期待する機能の関連と一致率



「お金がたくさんある」「ものがたくさんある」「子どもを良い人間に育てる」に有意差がみられた。両親の年代別に見ると，「子どもがたくさんいる」「子どもを良い人間に育てる」「家の習慣を大切にする」「老人や病人を大切にする」「近所の人や友だちとつきあう」が40歳以下の両親に高い率で選択されている。40歳以下の両親家庭は家庭形成途上にあり，祖父母との同居率が高いためと考えられる[5]。

③重視している機能と期待している機能の関連　重視機能と期待機能の関係をまとめたものが図1である。選択数の全体平均は，3.82>3.32で重視が期待を上回っている。期待が重視を上回っている項目は，両親が仲良く暮らす（夫婦がいっしょに暮らす），その家の習慣を大切にする（家の習慣をうけついでいく）の2項目である。児童・生徒たちが，夫婦関係の健全化とその家庭独自の歴史や伝統を持つことを強く意識していることがわかる。

重視，期待ともに1位であった精神安定機能は一致率も1位である。重視，期待2位の子どもの教育機能は一致率は6位である。以上から，家庭の機能について重視はするけれど期待はしていないことがわかる。世間一般に言われるところの「シラケ」又は「さめた」世代の反映かと思われる。子どもたちにとって，家庭はまず安らぎの場であることが第一であり，人間形成の場とはわかっているけれど，これ以上「教育」はしないで欲しいと子どもたちは考えている。

5　役割分担―意識と参加

子どもたちは，家庭に精神安定と教育の機能を強く求めているが，人間として生活するには，基本的な欲求を満すための活動とそれを支えるための経済活動が必要となってくる。

各々の家庭では，家族構成等の諸要素に従って，円滑な家庭生活を遂行するために役割分担をしている。ここでは，役割分担の考え方と実際の活動への参加について明らかにする。

①家事への参加　日常的な家庭内の仕事（家事，以下この言葉を使用）への参加の度合につ

第12表　家事への参加

			衣生活	食生活	住生活	買物	老人・幼児の世話	病人の世話	相談相手
男		する	99(39.6)	192(76.8)	215(86.0)	207(82.8)	93(37.2)	63(25.2)	138(55.2)
		しない	151(60.4)	58(23.2)	35(14.0)	43(17.2)	121(48.4)	148(59.2)	109(43.6)
女		する	190(76.4)*	238(95.2)*	234(93.6)**	219(87.6)	80(32.0)	66(26.4)	160(64.0)
		しない	60(24.0)	12(4.8)	16(6.4)	31(12.4)	54(21.6)	139(55.6)	90(36.0)
父の年齢	～39歳	する	80(60.2)	124(93.2)**	117(87.9)	121(91.0)	—	—	82(61.7)
		しない	53(39.8)	9(6.8)	16(12.0)	12(9.0)	—	—	49(36.8)
	40歳～	する	198(56.4)	292(83.2)	318(90.6)	292(83.2)	—	—	203(57.8)
		しない	107(30.5)	59(16.8)	33(9.4)	59(16.8)	—	—	148(42.2)
母の年齢	～39歳	する	155(57.0)	246(90.4)**	241(88.6)	247(90.8)*	—	—	157(57.7)
		しない	117(43.0)	26(9.6)	31(11.4)	25(9.2)	—	—	112(41.2)
	40歳～	する	130(58.8)	178(80.5)	203(91.9)	175(79.2)	—	—	139(62.9)
		しない	91(41.2)	43(19.5)	18(8.1)	46(20.8)	—	—	82(37.1)

* 1％水準で有意差あり　　（　）内は％
** 5％水準で有意差あり

第13表　家事参加の理由（百分比）

		いいつけられる	男・女だから	自主・自立	自分のため	家族が喜ぶ	家族がする	時間がない	したくない
衣	男	11.7	11.4	6.4	6.8	5.9	26.7	6.4	15.7
	女	10.3	7.3	15.9	13.9	7.8	19.6	4.9	7.8
食	男	21.1	6.3	10.1	16.0	15.6	13.5	3.4	6.3
	女	21.1	10.7	7.9	22.3	16.9	5.4	2.1	3.3
住	男	16.4	1.3	29.8	23.9	6.7	7.1	1.3	9.2
	女	14.5	4.1	34.9	24.1	5.0	4.6	4.6	4.6
買物	男	30.9	1.3	6.4	10.3	23.6	9.9	3.0	7.3
	女	28.4	3.7	3.3	16.1	16.9	12.0	2.9	2.5
老幼の世話	男	8.4	0.5	3.0	8.4	11.4	5.0	3.0	10.9
	女	7.7	2.6	1.3	9.4	8.1	5.6	2.1	2.6
病人	男	4.3	1.4	2.4	3.9	9.7	13.0	1.9	11.6
	女	3.4	3.0	0.9	5.5	8.1	11.5	0.9	3.8
相談	男	6.4	0.5	1.6	21.8	11.7	6.9	7.4	13.8
	女	4.0	1.0	1.0	20.6	16.6	5.5	6.0	11.1

いては，参加度の高い順に，住生活，買物，食生活，相談相手，衣生活，老人・幼児の世話，病人の世話である。下位の2項目は，対象となる相手不在の為下位であることが理由づけからわかる。「自分のことは自分でしたい」「自分のためになることだから」という積極的理由で参加する家事は，男女とも掃除，整理・整頓などの住生活に関するものである。買い物や食生活に関する家事は，「いいつけられるから」「家族が喜ぶから」「女だから（女子のみ）」の消極的理由づけによって行われている。男女ともしたくない家事は，衣生活に関するものである。「家族がしてしまうから」「時間がない」「男だから（男子のみ）」の消極的理由づけで参加しない家事は，衣生活，食生活に関するものである。

「よくする」「ときどきする」を合わせて，「する」とし，男女別に比較すると，衣・食・住に関して女子の参加度が高く，そのうち，衣・食について「女だから（する）男だから（しない）」の性的役割分担を理由づけにしている度合が高い。衣・食に関する家事は女の仕事という意識が男女ともに強く存在していることがわかる。

家庭内のことは女の役割，家庭外のことは男の役割という意識は永く存在していたが，母親の就労によって，家事の担い手は主婦だけに限定しない考え方や，男女平等意識の普及によって男子にも家事をさせる家庭もふえていることが予想される。しかし，実際に有職母親と無職母親を比較してみると，無職母親の家庭の方が家事の参加度が高い。仕事を持つ母親の家事軽減のために子どもたちは家事参加をするのではなく，一緒に過す時間が長く，「手伝って」と言われて家事参加をしているのが実情と考えられる。両親の年齢別に比較すると，若い両親の家庭で家事参加の度合が高いものが多く，特に食生活，買い物については有意差がみられた。両親の年齢によって生じる家庭の雰囲気や男女平等意識，家庭科教育の浸透の影響と考えられる。

②家族の役割分担　　社会構成の最小単位として家庭を考えるとき，家庭には対社会的な役割

第14表　家族の役割分担

	父	母	父と母	家族全員	その他・わからない
こどものしつけ	9(1.8)	66(13.2)	232(46.4)	164(32.8)	29(5.8)
近所とのつきあい	1(0.2)	53(10.6)	43(8.6)	362(72.4)	41(8.2)
親類とのつきあい	9(1.8)	6(1.2)	42(8.4)	406(81.2)	37(7.4)
お金を家庭に入れる	212(42.4)	13(2.6)	203(40.6)	37(7.4)	35(7.0)
PTAへ出席	16(3.2)	250(50.0)	131(26.2)	37(7.4)	66(13.2)

( ) 内は%

第15表　家庭の仕事・男女の分担（百分比）

		男女平等	女だけ	話しあい	わからない
小	2	44.0	12.0	17.0	27.0
小	4	35.0	32.0	12.0	21.0
小	6	48.0	6.0	35.0	11.0
中	2	30.0	13.0	49.0	8.0
高	2	9.0	5.0	92.0	4.0
男		28.8	14.0	38.4	18.8**
女		37.6	13.2	39.6	9.6
合計		33.2	13.6	39.0	14.2
父	～39歳	42.9**	15.8	21.1	20.3
	40歳～	29.6	12.8	45.3*	12.3
母	～39歳	40.1*	16.9	24.6	13.4
	40歳～	24.9	10.0	56.6*	8.6

* 1%水準で有意差あり
** 5%水準で有意差あり

第16表　家庭の仕事男女の分担・理由（百分比）

		男も女もすること	女のすること	それぞれの家庭	わからない
小	2	48.0	13.0	14.0	25.0
小	4	38.0	30.0	10.0	22.0
小	6	56.0	6.0	24.0	14.0
中	2	45.0	12.0	33.0	10.0
高	2	25.0	5.0	68.0	2.0
合計		42.4	13.2	29.8	14.6
父	～39歳	48.1	15.8	15.0	21.1
	40歳～	40.7	12.6	34.5*	12.5
母	～39歳	46.0*	16.5	17.6	19.9
	40歳～	38.0	19.5	44.3	8.1

* 1%水準で有意差あり

も生れてくる。そこで，それらの役割を誰が行うかについて第14表にまとめた。父の仕事：お金を家庭に入れる　母の仕事：ＰＴＡへの出席　父と母の仕事：子どものしつけ　家族全員の仕事：近所や親類とのつきあい　以上は，役割分担の１位になったものである。従来の日常茶飯事的な家族の仕事は母親，対外的な「家」を代表する仕事は父親が担当するという考え方から，子どもの養育は両親又は家族全員で，対社会的なことは家庭を一単位として全員で行うという考え方に変ってきている。ただし，ＰＴＡへの出席は，母親の役割として期待が高い。母親の就労の有無で比較すると，「生活するお金を入れる」について「父と母」とするものが54.1％であること以外は同一傾向にある。また，「こどものしつけ」については，無職母親家庭では父と母50.8％，母10.3％に対し，有職母親家庭では父と母43.6％、母14.7％であり，母親が仕事のため不在であることの不備を他の家族員の協力で補おうとする考えを高めるのとは逆に，母親への依存や期待を高めているのではないかと思われる。このことは，前述の家事への参加（母親の就労別比較）からも推察できる。

③性的役割分担意識　　家庭の仕事は男と女のどちらがやったらよいか，その理由は何か。

分担については，話し合いですればよい39.2％＞男女平等にすればよい33.2％＞わからない14.2％＞女だけにすればよい13.6％である。男女別では，男子で「男女平等」が減少し「わからない」が増加する。学年進行にともない「話し合い」が増加し，「わからない」が減少する。

また，分担の理由は，家の仕事は男女もすることだから42.4％＞それぞれの家庭によって決めればよい29.8％＞わからない14.6％＞家庭の仕事は女のすることだから13.2％の順である。学年進行にともなって，「それぞれの家庭によって決めればよい」が増加し，「わからない」が減少する。男子に「わからない」の率が高い。

役割分担についての考え方は，学年進行とともに家庭運営に関する認識も深まり，単なる男女平等論から各自の家庭内で話し合う個性的な運営へと変化している。次に両親の年齢別比較では，若い両親の家庭では男女平等論が，40歳以上の両親の家庭では話し合いが優勢である。また，母親の就労別比較では，無職母親家庭で「家事は女だけすればよい（女の仕事だから）」という傾向が強い。

以上から，家の仕事は男女どちらがやってもよい，という考え方が優勢であり，その理由は，「男女は平等なのだから」と「どちらか出来る人がやればよい」の２つがある。男女平等論の背景には，39歳以下の両親がうけた戦後教育の男女平等思想が，臨機応変論の背景には，40歳以上の両親の家庭生活の積み重ねによる相互扶助思想と実践があると考えられる。

Ⅴ　ま　と　め

盛岡市に於ける児童・生徒の家庭生活認識についてまとめると次の通りである。

ｉ）　児童・生徒の属する家族は，形態的には核家族型小家族である。核家族とは，「夫婦とその子によって構成される家族形態」[6] であるが，現代日本社会に於ける核家族化の進行は形態のみにとどまり，核家族の構成土台となる夫婦間の理解と信頼の面は疎かになっている。また，日本の核家族は「家」制度的拡大家族からの分離をスタートとしたために，その家独自の伝統，歴史，文化は否定し排除する方向で進み，所得分配の平等化，家庭内物資の等質化，生活意識の均一化によって家庭そのものが均質化した[7]。

児童・生徒が「両親が仲良く暮らす」「家の習慣を大切にする」の項目について，重視より期待が上回ったことは，内容の伴った核家族化と個性化を望んでいることを示している。しかし，自分自身の問題になると「たぶん結婚するとは思うけれど，誰でもすることだから…」という消極的志向でとらえている。

ii）実際の家庭生活に対しては，学年進行に伴い，より深く具体的にとらえるようになり，実際に参加もするが，「成り行きで仕方がなくやっている」という消極的志向である。

iii）家族の役割分担は，性別分担よりも家族一単位で行うものが多くなっている。有職母親にとっては，担当種類の増加は家事省力化が進んでも負担になっているのではないだろうか。「話し合いで（男か女か）どちらかがすればよい」という考えが優勢だが，実際に行うのは誰なのかという疑問が残った。

iv）家庭認識の基盤となっている家庭環境諸要因のうち，一番影響力を持っているのは，両親の年齢であった。

就労既婚女性の家庭運営や，ニューファミリー世代といわれる世代の家庭認識については，今後の課題としたい。

なお，本研究を進めるに当り，調査に御協力下さった児童・生徒の皆様と，電算機処理について御指導下さった東京学芸大学小澤紀美子助教授と，岩手大学電子計算機室の皆様に深く感謝いたします。（電算機は東北大学大型計算機を使用した）

注

1）経済企画庁編『国民生活白書　生活基盤の充実と機会の拡大』（大蔵省印刷局，昭和54年12月）104～105頁。
2）全国調査については，『家庭生活に関する認識の全国調査報告』にまとめられている。
3）日本家庭科教育学会編『家庭生活に関する認識の全国調査報告』（昭和57年6月）84頁。
4）日本家庭科教育学会編『前掲書』30～31頁。
5）祖父母との同居率は，39歳以下の父親の家庭：32.3%，40歳以上の父親の家庭：24.2%。
6）湯沢雍彦著『新版家族関係学』（光生館，昭和56年4月）11～14頁。
7）古谷　昭「家族の均質化傾向」（『家庭科教育　変動する家族と家族関係』57巻9号）42頁。